

## 「空っぽの美術館」が伝えるもの



念佛 明奈

その美術館に入ると、どの展示室も空っぽだった。透明な陳列ケースが置いてあるが、何も展示されていない。壁にも、一

枚の絵画もかかっていない。がらんとした空間に、展示品につける解説文「キャプション」だけが並んでいた。

準備中だったわけではなく、れっきとした「展示」だ。1月、ロシアの侵攻を受けるウクライナの首都キーウ（キエフ）にあるハネンコ美術館を訪れた。欧州だけでなく、中国や日本の美術品も数多く収蔵するウクライナ有数の美術館である。

2022年2月の侵攻後、ウクライナの多くの美術館・博物館は収蔵品を外部の安全な場所に運び出し、閉館を余儀なくされた。ハネンコ美術館も作品を避難させたが、ユリア・ワガノワ館長（46）は何もない壁を見て「この『空っぽ』を来場者に見てもらえないだろうか」と思いついたという。

美術館の建物の歴史や創設者の理念、展示されていた作品について説明するエクスカージョン（ガイ

ド付きの見学）を企画し、中庭に喫茶コーナーも設けた。企画があるたびに開館し、集まった市民が憩いのひとときを過ごすという。ワガノワさんは「戦争中であっても私たちの人生は続いている。私たちはじっと座って時が過ぎるのを待つ必要はない。来てくれる市民にはそう伝えていきます」と話す。

22年10月には、向かいの児童公園がロシア軍の空爆を受け、爆風で美術館の天井や窓ガラスが崩れ落ちた。スタッフには休むよう伝えたが、みんな美術館を続けることを望み、修理や掃除をしてすぐにエクスカージョンを復活させた。

あるキャプションが目に残った。「ツバー刀の柄を構成する要素 15〜19世紀」とウクライナ語と英語で書かれていた。ここには、私が生まれ育った国から渡ってきた日本刀の鐔があつたのだ。でも今はない。そして私がここにいる。空のケースの前に、その時間を生きている自分という存在に思いをはせた。「美術館や博物館の本来の役目は『人間性や人間の生活の価値』を提起し、『批判的思考』を尊重する大切さを伝えることなのです」。私は美術館と聞くとき以来、空っぽの美術館とそれを続けるワガノワさんのこの言葉を思い出すようになった。